

## 名誉会員関口鑓太郎先生の足跡を思う

本会の名誉会員の関口鑓太郎氏には、去る  
昭和56年7月21日永眠されました。  
ここに謹んで哀悼の意を表します。

社団法人 日本都市計画学会

関口先生御死去の報を受けたのはその当日なお上り切らぬ梅雨の蒸し暑い夕方だった。

享年八十五歳。

京都大学御退職の後、何度かの闘病生活にうちかたれ、前年11月には「関口先生を囲む会」を開き、造園学教室出身の教え子が全国から集まって先生の元気なお姿に接し、その後も正月にはお宅へ伺って話に花を咲かせたりして来ただけに、突然の悲報は我々を驚かせた。

同夜、お宅に参上して御遺体の枕頭に侍りながら、先生から学ぶべくして学び切れなかった多方面な御活躍の跡に思いを致したことであった。

関口先生は名古屋の御出身、八高、東大を経て、大正14年、我が国の帝国大学に始めて設けられた造園学講座の担当として京大へ赴任され、間もなくハーバード大学へ留学、欧米各地に学ばれて御帰朝、以後30余年の間、一貫して京大に教鞭をとられたこと周知の通りである。

先生が口にされた言葉の中に「守成を難かしいとはよくいうが、創始も苦しいものだ」というのがある。

日本における造園学の開講は東大の本多教授に始まるというものの、京大に新設された農学部で日本最初の造園学講座を担当された御苦心は如何ばかりか、と今にして思われる。

大正から昭和初年といえば、造園を学の領域に考える人さえ乏しく、造園と植木の相異を説くといった啓蒙すら必要な段階であったと聞く。

私事にわたるが、筆者が造園の専攻を志した三高生当時、京大で土木を教えていた父が「花屋になる気か」と驚いたのは終戦直後の頃である。

まして、伝統的な庭園に名のある京都で、先生が開講されたのは欧米で漸くその研究が発展段階を迎えようとしていた公園緑地論を中心としただけに、違和感をもって見る向も多かったようである。

また、帰朝されて数年、教室の運営も軌道にのろうかという昭和10年代の日本は戦雲の中であって、造園学自体、時代社会から白眼視される所であった。

続く昭和20年代、戦後の混沌の中「庭園よりは菜園を」と誰しも造園に関心を持たぬ時代がづづいた。

その中であって研究室の灯を守り続けられた先生は、文字通り創始と守成の労苦を一身に担って来られたと申して過言でないと思われる。

しかもその間、将来の飛躍に備えた先生が、研究室に



蓄えられた蔵書の数は知る人ぞ知るものがあつた。

研究室での雑談の折に、先生はハーバード大学のライブラリーの優秀さをよく話題にされたが、思えば先生の脳裡には若き日のボストンでの思い出が強く灼きついてもいたのだろう。

また、先生が時に口にされたのは「造園に学ぶ人間の最大の快事は、一生を通じて、これこそという作品を生み出すにつきる」旨の言葉であったが、この端々からも筆者には先生のさりげないロマンティズムが思われてならない。

思えば、先生はそのロマンを公園緑地という「造園と都市計画のかけはし」に託しておられたのだろうか。

我々が生活環境の豊かさという課題を都市計画を通じて如何に具現するか、という要請をうけつつある現在、先生の遺された足跡は省みられるべき多くを持つと思われる昨今である。

奈良女子大学住居学科教授 近藤 公夫

### 略 歴

- 1 生年月日 明治29年10月30日
- 2 学 歴  
大正11年4月 東京帝国大学農学部林学科卒業
- 3 職 歴  
大正14年4月 京都帝国大学農学部助教  
昭和11年3月 京都帝国大学農学部教授  
昭和34年10月 京大大学停年退職、京都大学名誉教授  
昭和25年以降 都市計画京都地方審議会委員など都市計画関連の公職を歴任  
昭和36年～昭和38年 日本造園学会会長
- 4 表 彰  
昭和43年 勲二等瑞宝章
- 5 御 死 去  
昭和56年7月21日

明治29年(1896)、名古屋市に生まれる。第八高等学校を経て東京帝国大学農学部林学科に入學、大正11年(1922)同科を卒業して大正13年(1924)東京帝国大学農学部講師となる。ついで翌大正14年(1925)には京都帝国大学助教授に任命された。昭和2年(1927)3月から昭和4年(1929)7月まで、欧米の造園、特に都市公園



・緑地の研究のため留学。昭和11年(1936)には京都帝国大学教授に任ぜられ、造園学講座の担当を命じられた。京都大学を昭和34年(1959)定年退職し、直ちに京都大学名誉教授の称号を授けられる。学内にあっては京都大学評議員、農学部附属演習林長に併任され、また学外では日本造園学会の会長および都市計画京都地方審議会、文化財専門審議会、京都市風致審議会等の各委員を長年にわたってつとめた。我が国に創設された造園学講座の担当者として、氏は造園学の広い分野にわたって活躍するが、とりわけ力を入れたのは、都市の緑地計画であった。

第一次世界大戦前後のドイツの公園・緑地がイギリス

やアメリカ合衆国をもしのぐほどの飛躍的發展をとげたことは周知のとおりである。ところがその実態をいちはやく我が国に紹介した先覚者は関口鏡太郎氏であったといっても過言ではない。分区園の紹介と啓蒙・普及、とりわけ国民の体位向上と青少年の精神涵養を志向したフォルクスパルクを評価してその真相を正しく伝えたのは同氏だった。しかもたんにそれらの実態を伝えるにとどまらず、我が国の緑地政策と実相を見つめつつ、将来を展望してそのあり方に示唆を与えた氏の功績は大きい。

このようにして、後進的であった我が国の都市緑地の推進に寄与した同氏は、国内の実地の造園設計にもたずさわったほか、釜山府公園計画、清津公園計画をも策定し、国際的にも貢献した。さらに留意すべきは氏の若い頃から持ち続けた土地利用についての見解である。都市周辺の農耕地や海岸、湖水、河川および道路など、国民のレクリエーションに役立つと予想される土地は公的使用にあてるべく、合理的な保護、保全策を講ずべきとの卓見である。現下ひろく叫ばれている主張はすでに半世紀以上も前に関口鏡太郎氏によって提唱されていたのである。

昭和56年(1981)7月21日心不全で死亡された。享年84才。